

「フォローアップ」とは何か

大学評価・学位授与機構の森でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

ただいま羽田先生から事例に基づく詳しいお話がありましたので、私はもっと大卒の、アクレディテーション団体の仕組みのを中心に、今回の訪問調査の成果をご報告したいと思います。

今日、私がいただいた、アメリカにおける第三者評価の動向という宿題に対してつけたタイトルでは、「米国における地域アクレディテーションと『フォローアップ』」として、「フォローアップ」は括弧書きにしております。この括弧書きの意味は追々おわかりいただけるのではないかと思います。

一応復習ですが、アメリカのアクレディテーション制度には2種類あって、1つは機関アクレディテーション、もう1つは専門アクレディテーションです（表1）。機関アクレディテーションの中に2種類あって、小さい規模の全国アクレディテーションと、それからWASCのような地域アクレディテーションの別があります。この地域アクレディテーションというのが、例えば日本高等教育評価機構がモデルにしたような、アメリカの先進事例ということになっております。今回我々は、主としてその地域アクレディテーションに関して調べてまいりました。

表1 アメリカのアクレディテーションの種別

機関アクレディテーション	地域アクレディテーション
	全国アクレディテーション
専門アクレディテーション	(分野別・全国規模)

先ほど、日本高等教育評価機構がアメリカの地域アクレディテーションをモデルにしたと申しあげました。しかし実際のところ、端的に言って、日本の認証評価システムとアメリカの地域アクレディテーションというか、アクレディテーション・システムというのは似て非なるものであると言うことができると思います。どの辺が違うのか、機関の評価に限ってざっとま

とめてまいりました（表2）。

表2 機関別認証評価と機関アクレディテーション

	機関別認証評価(日本)	機関アクレディテーション(米国)
歴史	・約5年	・約100年
政府との関係	・政府による認証	・原則無関係 ・連邦政府・州政府が利用
高等教育機関との関係	・高等教育機関が評価機関を選択 ・流動的・間歇的	・地域別担当制 ・固定的・恒常的
評価の間隔	・学校教育法により7年	・原則5年か10年 ・状況により短期評価

まず、歴史が違います。日本は始まって大体5年ぐらい。アメリカは、最初、高等学校のアクレディテーションから始まったのですけれども、それを含めて100年以上の歴史があります。

その歴史の問題を置いておいても大きな違いがあって、政府との関係は、我が国の場合は、認証評価機関というのは政府による認証を受けているから認証評価機関と呼ばれる、そういう関係になっておりまして、アメリカの場合は、細かく見るといろいろあるのですけれども、原則、無関係ということになっております。無関係を原則にしつつ、連邦奨学金、それから寄付金などの問題で、連邦政府とか、それから州政府などがアクレディテーションの結果を利用しているという形になっています。

それから、評価機関と高等教育機関、つまりは大学の関係ですけれども、日本の場合は高等教育機関が評価機関を選択することができます。複数ある認証評価機関のうちどこに行つて評価を受けるかということを選択することができます。その関係は流動的であり、評価の1時点限りの間歇的なものであると言えます。

一方、アメリカの場合は、羽田先生からもありましたけれども、地域別の担当制になっておりまして、例えば大学が静岡県にあつたら、もう静岡にある限りこの地域アクレディテーショ

ン団体とつき合っていくというように、その関係は固定的、かつ恒常的なものです。実際には静岡県ではなくて、例えばアラスカ州とかそういう複数の州別にアクレディテーションの担当が決まっています。つまり、地域によって担当が決まっているわけです。

評価の間隔は、我が国では学校教育法により7年ということになっております。アメリカの場合は、これも原則なのですが、5年か大体10年で、状況によって短期の評価というのもあり得るということになっています。私が今からご報告することの始まりと終わりは1つのことでして、アメリカの場合、アクレディテーション団体と大学はずっと常につき合っています。申し上げたいのはこのことです。

先ほど羽田先生からお配りいただいたこの1枚ものの資料、これはとてもいい資料だと思うのですが、表題のところをご覧ください。「WASC Reaccreditation」となっていますよね。「アクレディテーション」ではなくて「re アクレディテーション」となっている、この「re」には意味があるわけです。「reaccreditation」の「re」は、revise の「re」であり、repeat の「re」であり、remarriage の「re」であり、つまりは何度もくり返すということですね。

そもそも日本の認証評価とアクレディテーションは歴史が違っていて、この第三者評価についていえば、日本では今1期目が終わらんと欲しているところですから、ひとつの機関は原則として最大でも1回しか評価を受けていないのですが、アメリカの場合はすでに何度もくり返して行うもの、やってくるものということになっている、それがこの「re アクレディテーション」の「re」の意味であるというわけです。

したがって、この報告のタイトルでは括弧つきにしましたけれども、認証評価の「フォローアップ」というのは認証評価を1回行ったところの日本の文脈で考えたときの発想でして、アメリカのアクレディテーションの場合は、何がフォローアップで何が次への準備なのかわからない、渾然一体となった高等教育機関とアクレディテーション団体のずっと長いお付き合いというのが基本になっているというのが、1つ押さえておくべきことかと思えます。

変化する定期評価のサイクル

ここでフォローアップの問題はひとまず置きまして、本番といいますか、何年かに一度セル

フスタディをやって、そしてそれに従って訪問調査団がやってくる包括的調査というのがありますけれども、それをここでは一応「定期評価」というふうと呼ぶことにします。この定期評価のサイクルというのが変わってきているということに注目したいと思います。

1つは、今羽田先生から詳しくお話がありました WASC シニアの部ですね。これが、I・II・IIIステージの3段階システムになっている。こういう流れにあるのではないかというような羽田先生のお話でしたけれども、確かにそうです。

ちょうどよい機会なので、担当地域を確認しておきたいのですが、この地図の左側の色の濃い部分が WASC です。その上にノースウェストという地域があります。真ん中の一番広い地域がノースセントラル、その下の南部地域が SACS、その上のニューヨークを含む濃い部分がミドルステーツ、右肩がニューイングランドです（図1）。

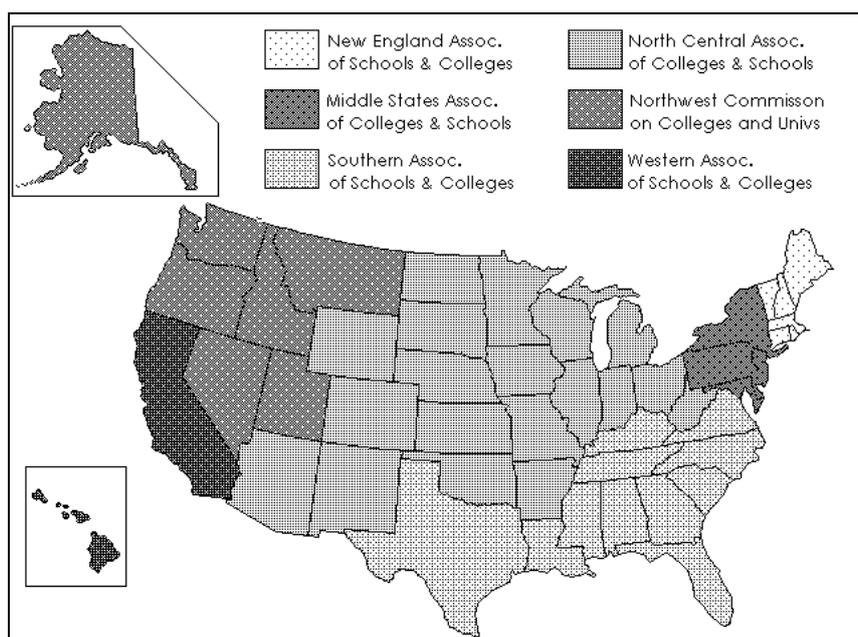


図1 地域アクレディテーション担当地域

地域の担当はこのようになっているのですが、WASC だけでなく、この地図の左上にあるノースウェスト・コミッションでも、7年間で4段階のシステムというのを導入しようと検討中です。7年サイクルという、あら、日本の認証評価と一緒にしらとか思うのですが、これも、これが全然違うのですね。

お手許のハンドアウトをご覧いただいたほうがよくわかるかもしれませんが、いま提案されている7年間で4段階のシステムというのをまとめて参りました(表3)。ご注目いただきたいのは真ん中の柱です。7年間の何年目に、横軸で、これだけのことをやるというのが、今ノースウエスト・コミッションが検討している新しい機関ア krediyteeshon システムです。

表3 NWCCU の4段階／7年間のシステム案

対応基準	年	内容
基準1 (使命、コア・テーマ、目標、成果)	1	基準1 についてのレポート 評価委員会でレポートのレビュー 評議委員会へ報告
基準2 (資源と能力)	3	基準1 についての継続レポート 基準2 についてのレポート 基準1、2 についての訪問調査
基準3 (計画と実施) 基準4 (効率性と改善)	5	基準1、2 についての継続レポート 基準3、4 についてのレポート 評価委員会で基準3、4に重点を置いたレビュー 評議委員会へ報告
基準5 (使命の達成、持続可能性、使命・テーマの適正化)	7	基準1、2、3、4 についての継続レポート 基準5 についてのレポート 基準3、4、5 についての訪問調査

これがどのような案かということ、表3を元にご説明します。真ん中の柱を見ていただいて、1年目の内容として、基準の1についてレポートを書くことになっています。表3の「内容」のカラムで太字にしたものが機関としての行動で、頭を落として細字で示した行が機関の行動に対してコミッションの側、すなわちア krediyteeshon 団体側でやることです。高等

教育機関が1年目にレポートを書いて、それに関してアクレディテーション団体による評価が行われます。大学は、3年目に、基準1はもう終わったのかと思ったら、基準1についてもまた継続レポートを書いて、それから基準2についてのレポートを新たに書いて、基準1と2についての訪問調査が3年目に行われます。

5年目になったら基準1はもう忘れていいのかと思ったら、そうではなくて、基準1についての継続レポートをもう一遍書いて、基準3・4についてのレポートをさらに新たに書き、それがアクレディテーション団体側でレビューされ、そして7年目は、基準1・2・3・4についての継続レポートを書いた上に基準5についてのレポートを新たに書き、そして基準3・4・5についての訪問調査が来る、というスケジュールです。

この表にない2・4・6年目は休んでいるのかということ、もちろんそうではなくて、機関の側はずっとレポートの準備をしています。もうずっと、間断なくアクレディテーションの仕事をしているというふうに変えるという基本的な制度の転換が、ノースウェスト・コミッションではもうほぼ決まっていて、あとはどう運営するかという議論の段階まで来ています。具体的には2009年初めにこのような制度改正が提案されて、2011年からはこれを実施する方向で今検討をしておられるそうです。

つまり、訪問調査のことだけで考えますと、全部で7年あるうちの、1・2年目は何もなくて、3年目に訪問調査があつて、3年空いて7年目に訪問調査があります。7年目が済めばそれで終わりかということ、アクレディテーションはreアクレディテーションでくり返すものですから、また2年空いて訪問調査があつて、3年空いて訪問調査があつてというのをずっとくり返していくということです。

我々が訪問団でノースウェスト・コミッションに行きまして、当然の疑問として訊ねたのは、こんな制度変更をして「会員校から反対は出なかったのですか」ということです。これに対してアクレディテーション団体側の方のお返事は、「何の反対もありませんでした」というのでした。我々訪問団はやや、本当にそうかしらとってしまいました。このことについては、またあとからお話することにします。

定期評価以外の評価

さて、フォローアップの話に戻りたいと思うのですが、先ほどお話ししたようにアメリカのアクレディテーションは、これは何がフォローアップで何が次への準備なのか、渾然一体となっていてなかなか分ちがたい状況にあります。かつ、その状況はさらに充進していることがWASCやノースウェストなどの例からもお分かりいただけるかと思います。そこでここでははっきり「フォローアップ」と決めず、定期評価以外のタイミングで起きる機関とアクレディテーション団体の接触について整理してお話ししたいと思います。

どこの地域アクレディテーション団体でも、制度は少しずつ異なっているのですけれども大体以下のようなことが、定期評価以外の地域アクレディテーション団体と大学の接触の機会になっているかと思われます。

まず、年次レポートです。これはすべての地域アクレディテーション団体が大学に対して要求しています。

それから、期外評価です。定期評価で何か問題があったときに、例えばその特定の問題に関してだけ、部分的な評価が期間を置いて追加的に行われることがあります。例えば「施設・設備に問題があると思いますから、これを2年以内に何とか改善してもう一度レポートを出してください」というようなことです。「もう一度出されたレポート」を基に、改めて評価が行われることとなります。また先ほど申し上げました年次レポートから問題が見出されたときなどに実施されることもあります。これが期外評価です。

それから、評価とは関係ないという言い過ぎですが——そもそも評価と関係ないことは行われていないので——評価結果そのものには影響しないその他の接触というものがあります。各地域アクレディテーション団体の文脈に沿った情報提供などです。我々はこれを「サービス」と呼ぼうというふうに考えているのですけれども、このフォローアップ的なサービスというのはどこのアクレディテーション団体でも提供されています。これらをはじめから一つ一つ見ていきたいと思います。

年次レポート

まず年次レポートについてです。

先ほど羽田先生からお話のあった WASC シニアの場合の年次レポートをご紹介しますが（表4）、大体これほどこの地域ア kredィテーション団体でも要求している書式というか、アイテムというものは似ています。

表4 WASC シニア年次レポート

<p>一般的事項</p> <p>機関名・住所・電話・Fax・ウェブサイト／カタログ（添付ないし URL）／記入担当者 設置形態等</p> <p>設置主体・関連団体（企業・宗教団体等）</p> <p>各部局責任者</p> <p>学長／学務担当最高責任者／ア kredィテーション・リエゾン・オフィサー／財務担当最高責任者／教授会主任／理事会の長</p> <p>学生</p> <p>FTE 学生数等</p> <p>学位プログラム（専攻リスト）</p> <p>新設学位プログラム</p> <p>当該年度新設（通学・遠隔）／次年度新設予定（通学・遠隔）</p> <p>ネガティブな評価（専門ア kredィテーション団体から）</p> <p>学費</p> <p>財務状況</p> <p>年間損益／会計監査報告（添付）／連邦奨学金返済不履行率</p>
--

いろいろある中でもご注目いただきたいのは、大学の中でだれが連絡の中心となっているかについて毎年報告を求めていることです。具体的にはア kredィテーション団体との連絡の中心となっているア kredィテーション・リエゾン・オフィサー（ALO）はだれか、その連絡先はどこかとか、そういう情報を得ています。それから、ほかのア kredィテーション団体からネガティブな評価を受けていないかというようなことや、もちろん学生数や、創設形態のほか、財務状況、それから、卒業生の連邦奨学金の不履行率なども調べております。

別の地域ア kredィテーション団体であるニューイングランド協会でも、レポートの内容は似たようなものです（表5）。ここでも、ア kredィテーション・リエゾン・オフィサーの連絡先を聞いておりますし、会計監査の結果を報告することにもなっております。すべての大

学が会計監査を受けなければいけないことになっています。

表5 ニューイングランド協会年次レポート

学長名／校名／住所
学長連絡先
学務担当最高責任者 (Chief Academic Officer)
アクレディテーション・リエゾン・オフィサー
学生数:実員／FTE 換算
大幅な変化の有無
契約関係(地域 Acc.のない機関との共同コース／プログラム)
キャンパス外プログラム
遠隔教育
会計監査
大学カタログ送付予定
タイトル IV の確保 (NEASC からのアクレディテーションの意義)
ネガティブな評価(他のアクレディテーション団体から)
フェイスシート:回答者情報

それから、連邦奨学金を受けるために、ニューイングランド協会からのアクレディテーションがどのような意義を持っているか。つまり、このニューイングランド・アソシエーションからアクレディテーションを受けていることが、学生の連邦奨学金の受給資格を保証しているかどうかというようなことも聞いております。これが年次レポートです。

期外評価

次は期外評価です。期外評価は何か問題があったときに実施するものです。これも地域ごとにあまり大きな違いはないのですけれども、ノースウェストの場合を例に取ってみます。ノースウェスト・コミッションでは ARFE と呼ばれる財務報告を求めることがあります。先ほどの年次報告書の中で、WASC とニューイングランドは財務状況の報告をさせておりましたが、同じような財務状況の報告はノースウェストでも求めておりました。そこに大きな問題が見られたときには、より詳しい財務報告というものが求められ、より詳しい評価をうけることとなります。これが ARFE です。実はこの、年次報告書あるいは定期評価での財務状

況に問題が見つかったときに ARFE と呼ばれる特別な財務報告を求めるというアイディアはニューイングランド協会が始祖でして、ノースウェストはニューイングランドの実践を輸入しています。

それから、先ほども申しあげました改善レポートはノースウェストも求めています。定期評価でア krediteーション団体側が何か問題を発見したときに何年以内と期限を切って機関に対する改善を求め、改善をした結果を報告させるものです。

また、大学が何か大幅な変更を行うときにも特別な接触があります。例えば今まで修士課程までしか持っていなかった大学が今度新たに博士のプログラムを出すとか、あるいは例えば今までアリゾナにしかなかった大学が今度新たにシカゴに分校を出すとか、そういう分校すなわちブランチ・キャンパスの新設のような大幅な変更があったら、それを報告して評価を受けることになっております。

ミドルステート地域も、今回のプロジェクトでの訪問先でしたけれども、この地域でも改善レポートの提出や、機関に大幅な変更が起きたときなどに報告を求めています。その報告に対してア krediteーション側が可否を判断するという、似たような期外評価が行われております。

フォローアップ・サービス

駆け足ですけれども、ア krediteーション団体から高等教育機関に対してフォローアップ的なサービスとして行われているもの、これは今日のご報告のある意味主眼でもありますので、6つの地域について例をお示ししております（表6）。どこでも似たようなことが行われていますね。新任評価員ワークショップ、それから、大学に向けてのセルフスタディ・ワークショップなどは基本的なサービスです。ノースウェスト・コミッションの場合は、新任評価員ワークショップに加えて新任の評議員ワークショップというのもやっています。評議員というのは各高等教育機関の構成員であると同時にア krediteーション団体の最高意思決定機関のメンバーですから、そこに任命された人は、新任評議員ワークショップを受け、かつ新任評価員ワークショップも受けなければいけないという決まりになっております。

表6 アメリカの地域アクレディテーション団体における「フォローアップ・サービス」

地域アクレディテーション団体	その他フォローアップ・サービス(例)
ニューイングランド (NEASC)	年次大会 地域ミーティング 新人ワークショップ 新任リーダーワークショップ セルフスタディワークショップ 5年レポートワークショップ
ミドルステート (MSA)	年次大会 レビュー1-2年前ワークショップ 訪問調査団長研修 訪問調査団員研修
南部 (SACS)	年次大会 大幅な変更ワークショップ 認定申請前ワークショップ 夏期研修
ノースセントラル (NCA)	年次大会 セルフスタディワークショップ PEAQ ワークショップ 学修成果評価ワークショップ
ノースウェスト (NWCCU)	年次大会 新基準ワークショップ* セルフスタディワークショップ 新任評議員ワークショップ
WASC シニア (WASC-Sr.)	年次 ALO ワークショップ セルフスタディワークショップ 学長・理事ワークショップ 訪問調査団員研修

ミドルステートの場合も、大体似ております。この団体にはレビュー1-2年前ワークショップというのがありますね。

それから、羽田先生からお話のあった WASC では、アクレディテーション・リエゾン・オフィサー・ワークショップなどに加えて、学長や理事を呼んで研修を受けさせる学長・理事ワー

クショップというものも行われております。

また、南部のSACSは、大幅な変更ワークショップであるとか夏期研修などがあるというのが特徴かと思われます。

フォローアップとメンバーシップ

ここまで見てきたような、本番の評価、つまりいわゆる定期評価以外の接触を可能にしているものは何か、年次レポートを出させるのはなぜか、大幅な変更があったときに大学が地域アクレディテーション団体に報告するのはなぜか、アクレディテーション団体の年次大会やワークショップがいつも盛会なのはなぜかという、これはメンバーシップ制をとっているということが1つの大きな理由になっていると思います。

つまり、大学はアクレディテーション団体の恒常的な会員なのです。最初に申し上げましたが、高等教育機関はアクレディテーション団体と常につき合っている恒常的な会員であって、逆に言えばアクレディテーション団体は、大学からなる1つの会です。決して政府の力を緩衝して伝える存在ではない。

先ほどお目につけたような会議やら研修会やらをたくさんやっているのに、なぜ、そこに人が来るのかという、それはアクレディテーション団体が行っていることなのだけれども、もとを質せば個別の大学がやっていること、大学がお金を出して作った会がやっていることだから、ということが指摘できると思うのです。

もちろん、アクレディテーションを失えば自大学の学生が連邦奨学金の受給資格を失うという、実質的な問題もあるわけですが、本来の哲学としては、大学が主体的にやっていることだから、メンバーシップ以てやっていることだから、大学はアクレディテーション団体とずっとつき合って、何かがあれば人が出ていくというふうになっているのである、というふうに理解できるかと思ひます。

言うまでもなく、このメンバーシップ制というのが、我が国の認証評価機関との大きな違いの1つです。

それはそれとして、羽田先生からもお話がありましたように、高等教育を取り巻く社会的な

文脈の変化というのは、アメリカにおいてもア krediteーション団体と大学との関係の仕方にも影響を及ぼしております。例えば、先ほどお話ししました年次報告にも変化が出ております。

これは、はっきり言ってしまえば、より詳細な数値を提供させるということになっておりまして、例えばニューイングランド協会では、これはオプションとしてなのですけれども、2007年から制度が変わって、大学の選択に基づいて、大学は「学生の達成データフォーム」という書式に記入して、毎年ア krediteーション団体に報告しなくてはならないというふうに決められています。

その学生の達成データフォームにはどんなことを書くかということ、例えば退学しないで学校に在学している学生の率、すなわちリテンション率とか、卒業率、それから卒業者のその後の進学率、これは例えば学士課程を終えたあとの人が修士、博士と高位の学位の取得をする率です。それから、州やら連邦やらの職業にかかわる免許の取得率、つまり教員免許とか医師免許とかですね。それから、それら資格職にかかわらない一般的な就職率など、こういう定量的に比較できるような数値を新たに提供させるようになっていきます。定量的に比較できる数値というのがここでは重要になってきます。

アメリカの、特に古典的なア krediteーションの制度と運用を保っていると言われていくニューイングランド協会などにしては、定量的に比較できる数値を毎年求めるということは発想の上でかなり大きなジャンプであると言うことができると思います。もっとも、次にお話しになる馬越先生のお話の中にある韓国の状況を見ると、こんなデータ提供はまだ甘いというような話になるかと思えますけれども、いずれにしても、羽田先生のお話にもありましたが、アメリカの地域ア krediteーションにはインプットをあまりにも重視しすぎているという批判が常につきまってきました。それが、ここにきて高等教育全体のアウトカム指向の影響を受けて、地域ア krediteーションのあり方も徐々にアウトカム指向と解釈しうる形に近づいていっていることがここに見て取れると思います。

この背後には、もうお気づきのように、2006年に出ました、連邦教育庁長官のスペリングスさんの名前をつけた「スペリングス・レポート」という答申が影響していると思います。

スペリングス・レポートがどんなものだったかざっとお話ししておきますと、スペリングス・レポートという答申は、連邦教育庁長官であるところのスペリングスさんに対する「高等教育将来構想委員会」からの答申です。この委員会に対するスペリングス長官の諮問のうちに、アクレディテーションに関して、アメリカのアクレディテーションはインプットを重視しすぎではないか、もっと定量的に測れるようなアウトプットを出させるべきではないかというような内容が入っていました。それに対しまして、当初は、国立アクレディテーション機関というようなものも提言されましたし、大学卒業者の学力を測る標準化テストというのも提言されました。

ところが、もちろんと言うべきか、このような提言は、大学および現行アクレディテーション団体の大きな反対を受けまして、だんだんトーンダウンしていくのですね。議論の段階で国立アクレディテーション機関や標準化テストの案は廃されて、現行アクレディテーション・システムの厳格運営が提言され、そして最終的には現行アクレディテーションにおけるアウトカムへの関心を提起するというような内容で答申が出ました。

最近になってというか、これももう1年以上前ですけれども、この答申を受けた教育庁長官であるところのスペリングスさんは、NACIQI という組織の会合でスピーチしています。この NACIQI というのはアメリカのアクレディテーション団体のある意味認可して、その結果を連邦としてアクレディテーションの結果を使えるようにしている仕組みです。その会合でスペリングス長官はこんなふうに言っています。「ひとつの物差しですべてを測ることは不可能です」。これも羽田先生のお話の中にもありましたけれども、「One size fits all」はもうあり得ない、大卒時の能力を測る標準化テストはあり得ませんというふうに言ったと報道されています。

アクレディテーションはアウトカム指向になったか

このように、最終的にはトーンダウンしたなりに、アクレディテーションのあり方について政策的な論争があったわけなのです。この論争が行われているあいだアクレディテーション団体側はどんなふうに対応したかといいますと、このアウトカム指向というのは、これはよ

く見るとア krediyteeshyon 団体と連邦政府の間に最終的に鋭い対立を生まなかったと思います。

例えば今日のテーマであるところのフォローアップとのかかわりで言えば、年次報告の内容には数値データを盛り込むように変化が出ておりますし、それから、WASC にあったように、アウトカム指向、かつ、もっと密なア krediyteeshyon 団体と大学との接触というものが制度化されています。同様のことはノースウェストでも引きかけているということもさきほどご紹介しました。

それから、あまり詳しく申し上げる時間はありませんが、CHEA という、ア krediyteeshyon 団体の傘団体は、学生の学習アウトカムに関して、大学を表彰する賞というものをも創設しております。

アウトカム指向を要求する社会の動きや、あるいは「スペリングス・レポート」に代表される政府からの圧力に対し、大まかに言って、ア krediyteeshyon 団体側としては、「我々は、昔から常にアウトカムを軽視はしていませんでした」という立場をとっています。ア krediyteeshyon 団体は先ほども申しましたように大学の団体ですから、大学の団体としては学生が学んだ結果を重視しないということは言いにくいし、そもそもありえないことのように思います。

むしろ警戒されたのは、「政府のアウトカム指向」のうち「アウトカム指向」の部分ではなくて、「政府の」という部分だった。政府のア krediyteeshyon への過剰なかかわりに警戒がされたのではないかと思います。

論争の結果、「ア krediyteeshyon 団体および高等教育機関連合」と「政府」は痛み分けで少しずつ折れ合ったというべきかも知れません。政府は当初の構想からはかなり譲歩しましたし、ア krediyteeshyon の運用には今見たような変化が生まれています。ここには微妙なバランスを取ろうとした形跡があります。政府は大きな変革を起こせなかったけれども、ア krediyteeshyon 団体は少しは政府の意向に沿った運用の変化を導入して見せているように思えます。

今日のテーマとはちょっと離れるので詳しくは申し上げませんが、例えば、今ユネス

コや OECD が音頭をとって、選択された分野で学生の学習達成度を測る AHELO というプログラムが試行段階にあります。ここにも、スペリングス・レポートを生むような、大学に対して学生の学習成果を保証することに関する社会からの要求が高まったことの影響が多く働いたのではないかと見ることはできるのではないかと思います。

何が求められているのか

最後に、ア krediyteshon 団体への大学からの期待について考えておきたいと思います。ア krediyteshon に関して基本的に共有されている認識、あるいは共有されるべき認識は、大学の質というのは、一義的に大学の責任によって維持・向上されるべきものであるということを前提に、会員校のセルフスタディを助けながら、質の向上でも正当性の担保でも、いずれにしても高等教育機関のあるべきステイタスを効率的に維持させる仕組みを提供すること、これがア krediyteshon 団体に基本的に期待されていることではないかと思われるます。

先ほど羽田先生からは、WASC は人々の集まりである、ア krediyteshon は人の集まりが行うことであるというご指摘がありました。会員校の正当性を維持しながら会の信頼性を維持して、そして、会の信頼性を維持しながら会員校を政府の過剰なかかわりから保護することが、ア krediyteshon 団体に期待されていることであるということが、今回のいくつかの現地インタビュー調査から感じたことでございます。

それに関連して、最初にご紹介したノースウエスト協会の 7 年サイクルについてですが、7 年サイクルといいながら、2 年経ったら訪問調査が来る、3 年経ったらすぐまた訪問調査が来るということに関して、ア krediyteshon 団体の方は会員校からの反対はなかったと話していらっしゃいました。これについて会員校のア krediyteshon・リエゾン・オフィサーの方に、訪問調査サイクルの短縮に関しては具体的にどういう意見を持っているかということ聞いてみました。その質問への回答は、「反対ではないということは絶対にない。それは我々の労働を多くすることである。しかし、何よりも欲しいのは、それによって何が変わるのかという情報である。ア krediyteshon 団体には、なぜこんなふうな制度変更を行い、

この制度変更が起きると何が起きるのかというようなことを、今もいろいろな研修会などを開いているのだが、それにして十分な情報提供をしてほしい」というようなお話でした。そして、「ア krediteーション団体にはスペリングス・レポートのようなものから大学を守って欲しいし、その機能は果たされていると思う」ということもうかがいました。

以上のことがアメリカで調査してきた内容です。最後にもう1つ、羽田先生がおっしゃったように、日本高等教育評価機構においても、次のサイクルの、今度はreア krediteーションになる認証評価をデザインする時期にさしかかっていると理解しております。そのデザインのためには、恐らく高等教育機関と認証評価機関と政府との関係に関する新たな発想が必要ではないかと思えます。瀧澤主幹にもいろいろお考えがおありのようですので、これに関しては私も期待してみたいと思えます。

以上でございます。どうもありがとうございます。